

自分の物語の主人公として生きる

校長 森 和 久



お子様のご卒業おめでとうございます。コロナ禍の中、異例づくめの一年でしたが、六年生のみなさんは前向きに、「できること」を考え行動

してくれました。この考え方、行動の仕方を今後に生かし、ますます活躍されることを期待しております。

さて、前回の学級通信で「成長」と「物語」について書きました。その補足を少々書かせていただきます。人間はたくさんの出来事があると、それを「物語」としてしか認識できないという特性をもっています。物語とは、二つ以上の出来事を結びつけて筋立てたもので、「努力を重ねた結果、今の成功がある」のように「因果関係」を示すことが多いです。例えば「歴史」は、たくさんの出来事の中から、いくつかの出来事をピックアップして因果関係を明らかにすることで、認識できるようになります。「歴史的事実」を全て正確に並べるとは不可能ですし、仮に並べたとして意味を持たせられないので、私たちは認識できません。幾つかの選択された事実をもとに「物語」にしないと私たちは歴史を認識できないのです。

これは自分の過去についてもそうです。私たちは、日々の出来事を全て覚えていることはできません。選択した出来事に筋立て持たせ「物語」にしているから認識できるのです。ですから「人生」は「物語」としてしか認識することができず、「生きる」ということは、自分が主人公の物語をつくり続ける過程だということになります。したがって、同じ経験でもどんな物語をつくるかで、その人にとっての意味が違ってきます。例えばある「失敗」を、「いくつかの失敗を乗り越えて成功に結びつけた」という物語として語るか、「何をやっても失敗するだめな私」として物語るかで、意味が違ってくるということです。

私たちが経験した出来事を、どのような物語にする

のかは、私たち次第ということになりますが、私たちがつくる物語は、既存の物語に大きく影響を受けています。私たちは、概ね既存の物語を引用することで自分の物語をつくっています。スポーツ選手や自分の好きなタレントの物語を、自分の物語に取り込むことはよくあることです。そして「〇〇選手のように頑張っ自分も夢をかなえる」という前向きな物語をつくることは、それによって自分が支えられるという点で、自分の成長にとってよい影響を与えます。けれども、それに縛られすぎると、「〇〇選手のようになれない自分」に突き当たったときに、困難が生じます。「だからだめなんだ」ということではなく、「〇〇選手のようにはなれなかったけれども、新たにチャレンジすることを見つけた私」という新しい物語に書き直すことが必要になります。

このような物語の書き直しのためには、引用すべき物語をいくつも持っていることは強みになると私は考えています。いろいろな人と関わり話を聞くこと、本を読むことはとても重要です。友達の物語、先輩の物語も引用される物語となり得ますし（「親の物語」は最も引用されやすい物語です。影響力が大きいだけにその光と影に自覚的にならないといけないと実感しています。）、小説、ノンフィクション等々もそうです。本を読んでいろいろな他の人生の中を生きる経験は、自分の状況を客観的に見つめ、自分の物語を必要に応じて書き換えていくために役に立つと考えます。これからも、お子様にはいっぱい人と関わり、多くの本を読んで欲しいと期待する次第です。

最後になりますが、これまで本校の教育に対し、ご支援・ご協力いただきましたことを心より御礼申し上げます。

※ 執筆にあたって、浅野智彦、榎本博明、千野帽子、鳶野克己、野口祐二、やまだようこ 諸氏の著作を参考にいたしました。

